1畳上げと呼ばれる作業。参道での本格練習の開始に先立って、安全対策として石柱や柵などに畳を巻き付ける。沿道に伸びる木の伐採なども行われた。

2参道での練習風景。走行前には指導部が毎回必ず手綱（たづな）や鐙（あぶみ）の状態を確認する。普段は優しい表情をみせる指導部も、練習中は厳しい姿勢で指導にあたる。現場には常に緊張感が漂っていた。

3神社社務所に集まった指導部のメンバー。練習時に記録した映像を見て乗り子一人一人の課題や、今後の指導方針などを話し合う。この日は平日夜にもかかわらず、話し合いは夜10時近くまで続いた。

4馬具の点検の様子。指導部と乗り子の保護者が馬具についた汚れを落としたり、革部分に油を差したりなど丁寧に手入れをする。5はきれいに整備された馬具。

新　一（しんいち）

今年５月に長野県の開田高原からやってきた木曽馬。愛称は“新ちゃん”。その愛らしい姿で、早くも子どもたちからの人気を集めている。まだ幼齢のため乗馬することはできないが、昨年他界した先代の木曽馬“秀三”の後継として、来年からは乗り子たちの練習馬としての活躍が期待される。流鏑馬当日は、神輿行列などでお披露目される予定だ。

８月下旬、参道の整備や馬具の点検のため集まった流鏑馬行事保存会指導部のメンバーと乗り子の保護者ら。自身も乗り子の経験がある方、息子が乗り子を務めたことをきっかけに保存会に入った方など、携わる理由はさまざまだが、行事にかける熱い思いは一つ。

伝統と地域を育み

支える者

祭り当日は“主役”となる乗り子たち。その陰には、それを支えるたくさんの大人たちがいます。

流鏑馬を支えるのは、妻木町の自治会役員や、有志らによって結成された流鏑馬行事保存会のメンバーです。中でも指導部と呼ばれる20代～70代の23人の会員が、祭り当日の３カ月以上前から、乗り子の指導や練習馬の手配、また保護者らと協力し、参道の整備や馬具の点検などにあたります。その活動は平日夜に加えて、祭りが近づくにつれてほぼ毎週末となります。指導部のメンバーのほとんどが仕事を抱える中、その合間を縫って活動にあたっています。

指導部の皆さんに、流鏑馬の魅力や指導にあたっての心掛けについて伺いました。１人の会員が、「本番の日、馬にまたがった乗り子の表情が、これまで見たことのないものに変わる瞬間がある」と話してくれました。表情の変わった乗り子は、本番で見違えるような走りを見せるとのこと。他の会員らも揃ってうなずき、この乗り子の変化を、周りの観客や家族の誰よりも間近で見られることが、やりがいの一つだと語ってくれました。また、この歴史ある地元の伝統行事に携われることがうれしくもあり、地域の一員であることを自覚できるため続けているとも話してくれました。

“安全第一”。指導部のメンバーの共通意識として、常に頭の中ある言葉です。とにかく落馬をさせないことが最優先。そのため、練習中は常に安全に気を配り、また常に危険と隣り合わせであるという意識を子どもたちに持たせるため、時にはあえて厳しい言葉で指導にあたります。

地域の夏祭りなどの際には、以前乗り子を務めた子どもたちが声を掛けてくれたり、手伝いをしてくれたりすることもあるようです。また、流鏑馬当日の手伝いを自主的にしてくれる子どもたちも少なくありません。

流鏑馬という行事を通じ、地域の大人が子どもたちを育て、その子どもたちは地域の一員としての自覚を持ちながら成長し、地元に貢献していく。この町の伝統が長く受け継がれている理由がそこにはありました。この地域づくりの本質ともいえる取り組みを続ける限り、この伝統行事は途切れることなく受け継がれていくことでしょう。

ぜひ一度は見に来てほしい

流鏑馬行事保存会会長　鈴木建夫さん

保存会の会長を務めて、今年で３年目となります。行事と関わる中で、子どもたちが真剣に取り組む姿に胸を打たれることが多々あります。「どうしても乗らせてほしい」と懇願する子どもに、安全面を最優先し厳しい決断をしなければならないこともありました。乗り子たちは皆、強い信念をもってこの流鏑馬に臨んでいます。その姿から、きっと熱い思いを感じ取ってもらえるのではないでしょうか。

妻木町のお祭りである流鏑馬ですが、他の町の方にもより広く知ってもらいたいという思いがあります。各町のお祭りもあり多忙な時期かと思いますが、お時間がありましたらぜひ一度見に来てください。

“地域力”を育むために

八幡神社禰宜（ねぎ）　黒田正直さん

祭りとは、本来地域の方の結び付きを強めることを目的としたものです。保存会のメンバーらは、就業後の時間や休日を返上して、３カ月以上前から行事に携わります。これだけ大掛かりな行事をやるのに、いわゆるアウトソーシングではなく、なるべく地元の力を頼るのは費用的な理由からだけではありません。協力して取り組むことで生まれる一体感や、成し遂げた時の達成感が地域のつながりをより一層強いものにします。

昨今、防災的な観点などからも再注目されている“地域力”。いざというときに最も大切なものです。今後も地域をつなぎ、地域の人々を育むきっかけのひとつであり続けたいと思っています。